

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

年度末、思い出を形に残す

1月は「行く」、2月は「逃げる」、3月は「去る」といいますが、あつという間に3月です。桜の開花も間近になってきました。

3月は学年末、1年のまとめの月でもあります。今回はそれにふさわしい取り組みについて考えてみます。

1 文集作り

1年間の成長を作文で綴り、それを製本し、文集としてまとめる先生も多いと思います。

子どもたちの労作・内容のある作文をまとめた文集は一生の宝物になります。

Q1
いつから文集作りに取り組み
すか。

- ① 3学期の1月から
- ② 1学期の4月から

文集作りのキーワードは「お手軽」です。教師の負担が少なく、隙間時間に取り組めることが肝心です。

通常は①でしょうが、思い出してみてください。ちよつと大変な思いをしませんでしたか。

▲作文の仕上がりがまちまちなので、添削するうちに製本の予定が遅れる

▲作文の印刷に時間がかかる

▲印刷した作文の保管場所の確保に苦労する

▲表紙の絵は教師が描くか、子どもから公募するかを悩む

▲製本する作文を机の上に置き、1枚ずつ取って「組む」作業に時間がかかる

▲表紙と作文をホチキスで留めるには力があるので、手が痛くなる

ひとり1枚の作文なら1冊分の文集の枚数は約40枚、2枚なら約80枚になります。子どもの文集ですから本人に製本させたいのですが、こんなに大量の紙を子どもがホチキスで留めるのは至難の業です。結局、教師が綴じることになります。

また、この時期は、学期末の通知表作成と重なります。年度末なので、指導要録、学級編成などもあり1年のうちで最も多忙を極める時期です。

この忙しさが先生の心の冷静さを失わせます。些細なことで、いらいら、子どもをしかつてしまえます。その結果、一人ひとりの文集に思いを込めるといよりは、早く終わらせたいという焦りの気持ちの方が先立ちます。

できあがった文集を手にした子どもや保護者は嬉しいでしょうが、先生は喜びよりも「終わった」という安堵感が大きくなります。

そこで、おすすめは②です。文集を作るからには、よいもの、すばらしいものを作ろうと思いがちです。それが教師のハードルを高くし、負担を強いることになります。そうではなく、日々の作文や詩などを普段からまとめていけばいいのです。

では、いつ作文を書かせるのか。それは帰りの会です。帰りの会のプログラムに「10分間作文」の時間を設けます。

子どもたちは毎日、B5の400字詰め用の原稿用紙1枚に作文を書きます。

提出された作文のうち8人分を、B4の上質

紙2枚に両面印刷し、翌日配布します。翌日の作文は、次の8人分を印刷します。子どもたちは、配られた作文を自分の作文と一緒に事務封筒にしまいます。

これを毎日繰り返すと、事務封筒に作文が入らなくなります。そのタイミングで、2穴リングのファイルを紹介し、購入してもらいます。

これに1年分の作文を保管すると、文集ができあがります。

なぜ最初は事務封筒なのかというと、子どもたちは1年間でどれほどの量の作文を書くのかを想像できないからです。事務封筒がいっぱいになると、2穴リングのファイルの必要性を感じるようになります。

2 来年度に向けての抱負

翌月、4月になると進級します。新しい学年に向けての決意表明、抱負を考えさせたいものです。

具体的で現実味があり、取り組みの意欲を継続できるような抱負が理想です。

Q2
どんな指示を出しますか。

- ① この1年間でやり残したことを振り返りましょう。
- ② この1年間でできたことを振り返りましょう。
- ③ 新しい学年に向けて、抱負を考えましょう。

①は重要です。何ができなかったのかが明確になるからです。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。
ベテラン先生によるケーススタディです。
こんな時、あなたならどうしますか？

やり残したことは、うまくいかなかったことでもありません。失敗は成長の秘訣です。ただ、この行為は重い気分になりがちです。場合によっては、「ダメな自分だな」と自己否定につながります。それに比べれば、③は前向きです。5年生の3学期なら、「6年生として最高学年の自覚をもって行動する」と高い志を掲げます。「1年生にとって、優しいお兄さん・お姉さんになる」といった温かい言葉を選ぶ子どももいます。しかし残念ながら、子どもが選ぶ抱負には個性がありません。誰にでも当てはまる文言を選びます。どうして抱負に個性がないのでしょうか。それは、自分を客観視していないからです。自分を高めるための抱負ですから、個々に合った内容にしたいものです。そのためには、自分を振り返ることで、何ができたのか。自分がどれほど成長したのかを確かめることです。そこで、おすすめなのが②です。「できたこと」という過去を現在の活動の拠り所として次の目標を立てることで、やっつけける、頑張ろうという裏づけにします。ハイハイをしている赤ちゃんは時々後ろを振り返って、お母さんを見ます。お母さんはニコリ笑ってそれに応えます。赤ちゃんはそれを見て、安心し、またハイハイを開始します。自分が不安になった時、振り返り、安心を確認できると、人は次への意欲がわくものです。この1年間でできたことの確認は、赤ちゃんが振り返った時に微笑むお母さんと同じ役目

をします。私はこれを「自分で自分を見守る」と呼んでいます。



3 教師からの、はなむけのメッセージ

この1年間をともに過ごした可愛い子どもたちです。彼らへの感謝と期待を込めて、教師からメッセージを送ります。

Q3 どんな形でメッセージを送りますか。

- ① 個別に言葉をかける。
- ② 個別に手紙を書く。
- ③ 個別に「カルタ」に言葉を書く。

①も子どもにとって、印象に残る教師の言葉です。

ですが、話した言葉は消えます。先生の思いがこもった言葉が風化してはもったいないです。

②は形となって残ります。ですから、①よりも後々まで子どもの記憶に残るでしょう。ただ、紙は破れやすく、長期保存はしにくいものです。

そこで、おすすめは③です。百人一首やいろはカルタで使う、あのカルタです。書道専門店に行くと、10枚セット500円程度で売っています。それに子どものイメージに合った漢字1文字を書きます。

例えば、しっかりしている子どもなら「凜」と筆で書き、「君はいつもしっかりしていたね。授業中の姿勢も美しかったよ。そういう姿を『凜』としている」というんだよ。だから、君には『凜』という言葉を送るよ」と言いながら手渡します。

クラスの子ども一人ひとりに合った漢字1文字を選び、重複しないようにします。この子はこんなすばらしいことがあったなあ、じゃあ、この漢字にしよう、とワクワクしながら漢字を選び、筆で書きます。担任としての最後の至福の時間となります。

手渡す日は修了式の前日です。修了式当日は通知表や持ち帰る物の確認などであつという間に下校の時間になります。

前日なら、「明日で1年のしめくくり」という余韻を残しながら渡すことができます。

カルタのよいところは、保管のしやすさにあります。紙はちよつとしたことで破れますが、カルタは厚紙なので破れることはありませんし、簡単には折れません。

また、大きさが手軽なので、机の前に飾ったり、財布に入れたりすることができます。